Geologoj Demokratiaj
地学団体研究会機関誌
The Association for the Geological Collaboration in Japan
そくほう
No.804
ISSN 0388－5208

2023年12月号　目　次

総会報告：フィールドシンポ報告…… 2・3
夜間小集会+巡検「秩父堆積盆地発生期の諸現象」… 4
会員の声：「ポストコロナ」とは？ …… 4
支部だより：第64回神奈川地学ハイキング …… 5
青森支部日帰り巡検の報告…… 6
会員の声：海洋放出に断固反対する…… 6
多発する自然災害と地学教育…… 7
本のあんない…… 7
放題・お知らせ…… 8

多発する自然災害と地学教育　―軽視され続けた「地学教育」―

近年、世界各地で自然災害が多発している。日本では、防災情報や被災地の映像が日々流れている。災害発生が予想されると、自治体から防災情報が多発され、テレビからは情報が走馬灯のように流れ続ける。

さて、これらの映像を見て疑問を多々感じる。最たるものは「一般市民は自治体が発表する防災情報を理解しているのだろうか」である。理解していれば、犠牲者はもっと少ないだろう。自治体もメディアも「責任回避のため」に情報を流しているようにしか思えない。

今夏の酷暑に代表される様に、地球規模で気候が激変している。その一例は、雨の降り方である。かつての「しとしと雨」から「スコール」になった。短期的に見れば、土壌の吸水能力以上に降雨するので、地表には一時的な川ができ激流となる。また、もう少し長い時間で見れば、山の保水力以上に雨が降り、限界を超えて山崩れを起こす。さらに深刻なのは都市部だ。人口が都市部に集中し、それまで危険で人が住まなかった土地にまで住宅が建ち、その結果、災害に見舞われる。その例が、2018年7月の広島の豪雨災害である。2021年7月の熱海の土石流災害に至っては人災である。また、都市では排水能力以上に降雨（設計基準の降雨は50mm／h）があると、排水溝から水が溢れ「泥沼に変貌」する。直近では9月の茨城―いわきの豪雨がこれに当たる。都市の排水基準は「しとしと雨」で、スコールを対象にしてはいない。

私は、4年前まで高校の理科教員をしてきた。その期間を通して、科目「地学」は著しく阻害されてきた。最たる例は、ある校長が明言した言葉である。「高校の理科で必要なのは『生物』と『化学』だけ。受験で使えない『物理』と『地学』は不要。あなたは『地学』の教員だから、福島県では不要な教員だ。」。とにかく、地学教育は軽視され続けてきた。現在の様に防災情報が多量に流れても、地学の内容（気象や地質）を理解していなければ、迫りくる危険すら認識できないだろう。人的被害の一因は、ここにもあると私は見ている。

私は岩手県の一関一高の卒業生で、高校の教員から「世の流れに抗う」ように教育されてきた。これとは逆に、福島県に奉職中は県教委からの制約が年毎に増え続けた。そんな中でも、定年退職直前の学校では、生徒達を野外に連れて行き、植物や昆虫、地形や岩石、地すべりの跡などを見せ、生きた情報を伝えるように心がけた。野外での生きた学習は、生徒達の脳裏に強く残ったようである。その中で、私が生徒達に繰り返し言ってきた事は「テストで100点取っても、実生活で生かせねば何の意味もない。その逆も真なり。」。今こそ、実生活で大切な地学教育を推進することが極めて重要になったと私は思う。

（福島支部　千葉茂樹）

そくほう　No.804

2023年12月1日発行　（毎月1回1日発行）
編集　地学団体研究会全国運営委員会事務局
発行　地学団体研究会
印刷　株式会社アイネクスト
TEL　029-836-5765　FAX　029-836-5766

〒171-0022　東京都豊島区南池袋2-24-1 八大ビル301号
TEL　03-3983-3378　FAX　03-3983-7525
E-mail　chidanken@tokyo.email.ne.jp
https://www.chidanken.jp
郵便振替　00160-2-144318　地学団体研究会